



## 学習者には 最新の紙の辞書で指導しよう



相澤 広喜

この文章を執筆しようとしていた9月15日，折しも OECD より ICT の活用と学力の相関の研究結果が発表された。昨今話題になることが多い PISA のデジタル能力調査の分析結果であるが，学校でコンピュータを利用する頻度と読解力に関しては相関があるとは言えず，コンピュータ機器の利用能力に関しては，むしろペーパー版読解力テストの成績がよい国ほど高いことが示された。

効果的な指導を抜きにして，学習者に情報機器を与えるだけでは適切な情報を得られるようにはならない，ということが証明された。わたしの勤務してきた高校では，少なくとも1年次は紙の辞書を，という指導を行ってきた。これには時代遅れではという声もあるが，今回の報道によって，もっと自分の感覚に自信を持ってよいと感じさせられた。この報道によって今後とも「紙の辞書」を用いて自学自習を促す指導を続けていきたい，との思いを新たにしたい。

### ■英語表現 I・IIでの活用

さて，わたしは本年度より英語表現 I・II を担当することとなった。課ごとにテーマ英作文として100字前後のエッセイを課し，提出することを課題としている。添削をし，返却をするという作業を繰り返していたが，2学期より，生徒相互のコメントを付けることを課してみた。コメントは日本語でよいとしたが，始めてみたところ「こんなに真剣に書いたことはなかった」との感想があった。同級生に自分の文章を読まれる，という経験はあまりなく，刺激になったようである。まだ

2回目の提出ではあるが「他人に伝える」意識が増したようで，以前より表現の正確さが上がり，格段に読みやすいエッセイが提出されるようになった。いくらかでも意味のある言語活動に近づいたからではと考える。

しかしこのエッセイ課題を添削していて，いくら解説してもなくなる間違いが幾つかある。現時点で最新の学習用英和辞典である『ジーニアス英和辞典 第5版』(G5)は，その点を読みやすく解説している。具体例を幾つか挙げてみたい。

日本人によくある間違いとして，G5の because に語法(1) [Because で文を始めない] として朱の網掛けされた記述がある。会話体の応答の影響であるが，生徒のエッセイにおいても Because で文を始める例が多く見受けられ，添削によって修正を試みているが，なかなか直らない。G5中の記述を示唆することによる書き直しを評価の対象とし，定期考査にも出題することによって語法の定着を図りたいと考えている。

また主語に“persons”を用いる例も多い。G5で people ㊦①の注記には「(1) persons はあまり用いられず，people がふつう：日常語では two persons より two people というのがふつう」とある。ある和英辞典で「人々」をひくと3項目めにやっと people がでてくる。電子辞書の検索順位に従っているものと思われるが，後を絶たない間違いである。

また，多くの用例が文単位で記載されているので参考にしやすい。G5では，高校で初出の，状態をいう動詞についても例文を用いて解説してい

る。forget 動④①には、《◆通例進行形不可》としつつ、I completely forget her name. 《◆「忘れた」状態をいう》 / I'm forgetting names nowadays. 《◆現在の一時的習慣を表す進行形》とある。文脈に応じた表現によって時制の定着を図る指導に有効である。G4では句単位の用例が多かったことに比して文用例の割合が多くなったように感じられ、使いやすさが増している。

### ■「英語会話」でも利用

また、わたしは昨年度より3年生の英語会話の担当をしており、スキットを作成させ、パフォーマンステストをしている。生徒に場面設定のみ与え、プロットとセリフを書かせる。その際、会話表現の参考書というものはあまり利用せず、教科書の例文の応用に留まってきた。G5では会話表現についても多くの記述があるので、今後利用したい内容が多数ある。

上記の forget [類語比較] では、「forget は物を持って来るのを「忘れる」の意で、原則として場所の副詞(句)なしで用いる。leave は具体的な場所に「置き忘れる」の意で、場所の副詞(句)を伴うが、behind がつくると場所の副詞(句)はなくてもよい」とある。教科書の用例のみで学習することに比べてはるかに活用範囲が広がる。

またわたしは30年前に大学に入学し相応の教育を受けたと考えるが、英語という生きた言語を教えるにあたっては、自分が学んだ文法や発音が、時とともに変化しているのに気がつきつつも、理解はしていない場面に出くわすこともある。例えば more の「語法」。「現代英語では、本来-er 型であったものが次第に more 型に移行していく傾向がある。したがって、現在両方の型をとる語もかなり多い。どちらを用いるかは、書き言葉・話し言葉の別や文体・文脈、さらにリズムによって決定される。一中略一 “I couldn't be more happy.” など。用例としては目にすることが多くなっているが、その分析を簡潔に収録している

ので、学習者にも説得力がある。

スキットの脚本は1時間で作成させ、ALT に添削してもらっているが、さらに JTE の目を通して、G5中の参照箇所を指示して書き直させることで、自然な表現の定着が期待できる。

### ■自律的学習の道具として

文部科学省が次々と教授法の改善を指示しており、我々高校教員も研修に追われている感が否めない。例えばアクティブ・ラーニングの導入がある。しかし、これはわれわれ、また諸先輩方が様々な形で授業に取り入れてきたものである。

文部科学省によるとアクティブ・ラーニングとは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、一中略一 発見的学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」(文部科学省 HP より)

高校教員としてわれわれが従来から利用してきた紙の辞書の利用法を再度生徒に提示し、促すことによって生徒の言語活動を活発、より自然なものにし、双方向的な学習を促進することができると思われるが、今回の OECD の分析に示されているように、基礎的な読解力、学習力の習得を援助していけば、今後の CBT の導入なども恐れるには及ばない。

また文科省の CAN-DO リストの活用に関しても「生徒自身が主体的に自律的学習者として活用していくこと」が不可欠な要素として挙げられている。また、そのモデルとなっている CEFR の指標として、われわれ教員の大きな役割とは学習方法の活用を援助すること、その具体的なモデルを提示することとある。学習者用に文章、会話両面を意識して編集された G5は「自律的学習」の道具として最適な英和辞典である。

(あいざわ ひろき・兵庫県立伊丹高等学校教諭)